

詩編 95 : 6~7

コリントの信徒への手紙一 12 : 26~27

「わたしたちはキリストの体」

【前奏】

【招詞】 詩編 124 : 8

【祈祷】

【聖書】 詩編 95 : 6~7、コリントの信徒への手紙一 12 : 26~27

【説教】 「わたしたちはキリストの体」

<教会>

今日のコリントの信徒への手紙一 12:26~27 は、宮崎中部教会の新年度の年間聖句です。
「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」

あなたがたは、キリストの体である、とされています。

教会に連なるわたしたちは、「キリストの体」と呼ばれます。イエスさまを頭として、わたしたちはそのイエスさまの体に繋がっている、部分部分です。

わたしたちの体を見てみると、目があり、耳があり、手があり、足があり。形も違い、機能も違う、そんな部分部分で、一つの体が造り上げられています。

同じように、キリストの体である一つの教会には、色々な人が集っています。みんな違う。年齢、性別、職業、出身、趣味、生活…こんなに何もかも違う、多様な人たちが集まっているところは、そうはありません。

なぜなら、教会は、わたしたち人間の属性によって、つまり、趣味が一緒とか、世代が同じとか、そういうことで集まっている集団ではないからです。

教会に集っている者たちの共通点。それは、イエスさまに属する者である、ということです。イエスさまを信じる者とされている、という、たった一つの共通点によって、わたしたちは集められています。

一人一人が、イエスさまと出会い、十字架と復活の救いの御業を知った。イエスさまが、わたしの罪を贖い、赦しを与えて下さり、永遠の命と、復活の約束を与えて下さることを信じた。そうして、洗礼を受けた者たちの群れが、「教会」です。

これは繰り返し言われることですが、「教会」とは、十字架の付いた建物のことではありません。神さまに選ばれ、救われ、イエスさまの御許に集められた者の群れのことを、「教会」というのです。

その「教会」は、「見えない教会」と、「見える教会」があると言われます。

「見えない教会」は、イエスさまに結ばれた、すべての者たちが連なる教会です。過去も、現在も、未来も、地域も全部超えて、イエスさまを信じ、お一人のイエスさまに結ばれた者たちすべてが連なる、時間も歴史も貫く、目には見えない、イエスさまの教会があります。

しかし、その中でわたしたちは、時代と場所を同じくし、具体的に顔と顔とを合わせて、共に集められている、そのような地上の、一つの「見える教会」に属しています。

わたしたちは皆、必ず、どこかの見える具体的な一つの教会で洗礼を受け、その教会の一員になって、そこで兄弟姉妹と共に、毎週礼拝をささげていくのです。

この宮崎中部教会も、「見えない教会」に属している中で、この時代、この宮崎市の街中に存在し、兄弟姉妹が集められている、一つの具体的な「目に見える教会」です。

<キリストの体>

さて、そのような見える一つの教会に向けて、今日の御言葉は語られています。「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」

ここで、気を付けなければならないのは、この御言葉は、わたしたちはみんな違うけれども、一つの体のように、一体となって歩みましょう！苦しいことを分かち合い、喜びは共にして、一緒にやってみましょう！という、スローガンや目標ではないということです。

聖書は、はっきりと「あなたがたはキリストの体」である、と言い切っています。

わたしたちは、これだけ違いがある中で、何とか努力して、何とか心を一致させて、頑張っ一つになろうとするものではありません。あなたたちは、すでにイエスさまの一つの体なのだ。もう一つの体となっているのだ。

これはそのような、今のわたしたちの現状、事実を、語っているのです。

今日読まれたところの少し前、12：12～13には、このような御言葉があります。

「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数も多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。」

一つの霊によって。一つの聖霊によって、皆、同じ一つの信仰へと導かれ、皆、お一人のイエスさまに救われ、皆、同じ一つの洗礼を受けて、イエスさまの一つの体に結ばれているのです。そして同時に、同じイエスさまに結ばれている兄弟姉妹とも、そのイエスさまの一つの体にあって、互いに結ばれているのです。

わたしが洗礼によって、イエスさまの体の部分となり、他の兄弟姉妹も同じようにイエスさまの体の部分であるなら、その兄弟姉妹は、わたしの体の部分でもあるのです。

「あなたがたはキリストの体である、また、一人一人はその部分です。」

わたしたちが、キリストの体である、一つの体である、ということは。わたしたちの決意とか、覚悟とか、努力とか、そういうことによるのではなく、聖霊によって、神さまの御業によって、そのようにされている、という事実です。

そうであるならば、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」というのも、実際にそうであるはずだ、ということを行っているのです。

わたしたちの体も、たとえば、お腹が痛くなれば、体全体の力が入らなくなり、集中力もなくなり、他のことも何もできなくなってしまいます。お腹が痛いのを無視して、足だけ元気に走ることは出来ません。一つの部分が痛むなら、体のすべてが、その痛みが和らぐように、庇いながら、労わりながら、過ごすことになるでしょう。

反対に、たとえば肩を揉んでもらったら、頭痛も和らぎ、心も軽くなり、全身がリラックスして心地よくなる。部分の心地よさが、全身の心地よさになるのです。あるいは、髪型をほめてもらったら、気分が良くなり、外に行きたくなって、体が活動的になったりする。

そのように、一つの体であるならば、一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しむこと。一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶこと。これは、誰に言われるでもなく、一つの体として、当たり前なこととしてそうである、と言っているのです。

だとすると、もしもそうになっていないなら。それは、却ってどこかがおかしい、ということになります。

同じ体の中で、一つの部分が苦しんでいるのに、他の部分はその苦しみを感じていない。どこが部分が痛いかわからない。それはおかしいのです。一つの部分が尊ばれたのを、他の部分が喜んでいない。何も嬉しくない。そんなことはないはずなのです。

一つの体が、一つの体として、生きていく。頭なるイエスさま許で、それぞれの部分の苦しみも、痛みも、喜びも、互いに共に感じながら、助け合い、支え合い、喜び合い、感謝し合い、全体が一つとなって、調和して歩む。それが、教会の姿、イエスさまに救われ、一つに結ばれた、キリストの体である、わたしたちの姿であるはずなのです。

<部分の思い>

「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」この聖書の言葉は、パウロという伝道者が、コリントにある教会の信徒たちに書き送った手紙の中に出てくる言葉です。

このことを、パウロが告げなければならなかったのは、コリント教会の人々が、キリストの一つの体であるのに、他の部分の苦しみを感ぜない。他の部分の喜びを喜ばない。そんな、どこかおかしい状態になっていた、ということです。

12：12～31 には、パウロの分かりやすい、キリストの体についての教えが語られています。それぞれ、後で読んでいただけたらと思いますが、その中で、たとえば 15～16 節には、こうあります。

「足が、『わたしは手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、『わたしは目ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。」

これは、一つの解釈として、ある部分が、他の部分と自分とを完全に別物として、自分は自分だからと言って、体全体から離れようとする事です。自分のことだけを見つめ、他の部分のことを置いて、わたしは自分で自分の信仰生活だけを守っていく。自分は自分。他の人と一緒になくてもよい。そんな歩みをしようとする事です。

また、もう一つの解釈は、他との違いを見つめることで、自分に劣等感を抱く事です。こんな自分なんかは、体の一部ではない。いてもいなくても一緒だ。そんな風に思って、身を引いてしまおうとする事です。

どちらにせよ、他の部分と一緒に歩むのを拒む、ということです。

また、21節にはこうあります。「目が手に向かって『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かって『お前たちは要らない』とも言えません。」

これは、自分に不都合に思えたり、足手まといに思えたり、役に立たないと思えたりする部分を、要らない、と言って切り捨てようとする事です。

でもそれは、自分自身の一部を切り捨てることと同じなのです。

自分は体の一部ではない、と言うことも。部分が部分に対してお前は要らない、と言うことも。どちらも、他と一体とされていること、一つの体であることを忘れていきます。

一つの体の中で、自分自身という部分の存在は、他の部分にとって必要な存在です。それと同じように、他の部分も、自分にとっては欠くことのできない、必要な存在なのです。

確かに体の部分には、目に見えて活躍する部分、見栄えのよい部分、力のある部分があり、また反対に、どこにあるか分からないような部分、見劣りのする部分、弱い部分もあります。

でも、22～25節にはこうあります。「それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとし、見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。」

ここには、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのだ、とあります。神さまは、そのような弱い部分をこそ、重んじられて、体を組み立てられたと。そのような部分があるからこそ、他の部分は、その部分を覆ったり、引き立てたり、心を配ったりして、分裂せず、互いに配慮し合う一つの体として、成り立っていく、というのです。

<体は一つ>

…さて、今わたしたちは、自分自身のことを、体のどのような部分として考えていたでし

ようか。強い方の部分でしょうか。弱い方の部分でしょうか。

結局わたしたちは、やっぱりどこかで自分と人とを比べて、自分が強いか、弱いか、役立つか、役立たないか、そういうことを考えてしまっているのではないのでしょうか。

でも、わたしたちは誰も、優れているから、強いから、役に立つからといって、イエスキリストの体に結ばれたのではありませんでした。みんな、どうしようもない罪人でした。みんな弱く、疑い深く、愚かで、見劣りのする、傲慢な、罪人だったのです。

そんな、どうしようもない、弱いわたしを、神さまは愛し、慈しみ、重んじて下さいました。そんな、罪深いわたしのために、イエスキリストは弱くなり、小さくなり、わたしよりも低くなり、誰よりも見劣りのする者となられて、十字架に架かって死んで下さいました。

しかし、その弱さと苦しみと悲慘に満ちた、見劣りのするイエスキリストの十字架こそが、わたしたちの救いの御業となり、神さまの栄光が最も現わされたのです。

わたしたちは、そのようにして、イエスキリストの体に結ばれたのです。一人一人、かけがえない者として、愛すべき者として、憐れむべき者として、イエスキリストが十字架によって、ご自分の体に結び付けて下さったのです。

ですから、ここで大切なのは、まずわたしたち一人一人が、イエスキリストにとって欠くことのできない愛すべき存在、重んじられている存在である、ということです。

「キリストの体」として、共に救われ、共に結ばれたわたしたちは、それほどに、互いが欠くことのできない、大切な存在であることを知らねばなりません。そしてわたしたちは、イエスキリストにあって、互いに、互いが、自分の一部分となっているほどの存在なのです。

そして、その部分である、わたしたち一人一人に与えられた賜物は、確かにそれぞれ、内容も、大きさも違います。でも、それが大きくても、小さくても、強くても、弱くても、見栄えがしても、見劣りがしても、それは体全体のために与えられたものであり、体全体のために必要なものであり、体全体のために喜んで用いられるべきものなのです。

手は、手だけのために動くのではありません。体全体にとって必要な動きをします。目は、目だけのために見るのではありません。体全体のために必要なものを見るのです。

わたしが、自分に与えられた力を、体全体のためにささげる時。わたしが持っていない力の部分は、他の人が担い、差し出してくれます。

だからわたしたちは、それぞれ置かれているところで、それぞれ与えられたものを、体全体のために、共に喜んで用いるのです。

その賜物を用いるところは、具体的に体を動かして奉仕をすることであったり、あるいは、ひたすらに祈ることかも知れません。でも、どのような業も、体全体のために必要な業であり、欠くことのできない業なのです。部分部分が、それぞれ与えられた働きをすることで、頂いている力を出し合うことで、体全体が、一つの体として、頭なるイエスキリストの思いに従って、生き活きと歩むことが出来るようになるのです。

わたしたちが、イエスさまの体であって、その賜物を喜んで差し出す時。それがどんなに小さくても、見劣りがするものでも、キリストの体の中で、神さまはその一つ一つを、ご自分の栄光を現わすものとし、救いの御業のために豊かに用いて下さいます。

そして、わたしたちは、一つの体として、苦しみも、痛みも、喜びも、共に感じます。

わたしたちは、自分の体のどこかにケガをしたら、その痛みをずっと感じて、気にしているように。教会に連なる兄弟姉妹が抱えている痛みや苦しみを、自分の体の一部の痛みや苦しみとして、感じる事が出来ているでしょうか。そこに心を配っているでしょうか。

苦しみや痛みがあるところには、その苦痛を和らげる手当がなされます。苦しむ兄弟姉妹のためには、祈りが集められ、心が配られ、愛が注がれていきます。そうして、まさに弱いところ、苦しみのあるところにこそ、神さまの癒しの御業が、恵みの豊かさが現され、また、互いを配慮する心が育てられていくのかも知れません。

そしてまた、喜びも共に味わっていく。その喜びとは、神さまの恵みを味わうことに他なりません。一人一人に与えられる神さまの恵みを、癒しを、慰めを、体全体で味わい、教会全体の喜びとする。そうして体全体が、感謝と賛美で満ちていきます。

そうして、イエスさまの愛の御心が体の隅々にまで行き渡り、体は一つとなって、神さまを礼拝し、神さまをほめたたえ、生き活きとした体として歩いていくのです。

わたしたちは、イエスさまを信じて、救われて、洗礼を受けて、そして一人ぼっちで信仰生活を送っていく、なんていうことは、絶対にありません。

一人一人が、洗礼によって、キリストの体の一部とされたなら、それからは、体全体の中で信仰生活を守り、与えられた賜物をささげあい、苦しみを分かち合い、喜びを共有し、体全体で成長していくのです。

一つの部分が、病んでしまったり、弱ってしまった時にも、他の部分がそれを助け、補い、支えます。わたしが祈れなくなった時、つまずいたとき、疑い、迷い、倒れた時。そのような時も、独りぼっちでどこかに倒れて、置き去りにされているわけではありません。

そのような時でさえ、信仰の群れの中にいる。キリストの体の中にある。自分が祈れなくても、兄弟姉妹が祈り、支えてくれています。その中で、また癒され、励まされ、立ち上がっていくことが出来るのです。

そうやって共に祈るために。一つの体として歩むために。わたしたちは、イエスさまにある交わりを大切にし、兄弟姉妹の苦しみを知り、痛みを知り、そのことを自分の苦しみや痛みとして祈りたいのです。また、喜びや恵みの出来事があれば、そのことを自分の喜び、自分に与えられた恵みとして、感謝して共に喜びたいのです。

そのような、一つの体としての交わりを、大切にしたいのです。

聖書において「交わり」とは、単に交流をすること、人付き合いをすること、ではありません。「交わり」と訳されているギリシア語の「コイノニア」という言葉は、本来「分かち合う、共有する」という意味です。

お一人のイエスさまの救いに共に与り、聖霊なる神さまの一つ恵みを共有し、一つの体として、養われ、生かされているわたしたちは。お互いの賜物も、祈りも、課題も、喜びも、一つの体として分かち合い、共有して、歩んでいくのです。

そのようにわたしたちが、キリストの体として、体のすべての部分に、イエスさまの愛の御心が、血のように行き渡り、イエスさまの救いの恵みを、神さまの愛を、地上に現わす教会として、歩んでいくことが出来ますように。

そして、このイエスさまの体に、共に一つの聖霊を受け、共に同じ救いの恵みを共有した、一人でも多くの者たちが結ばれて、さらに賜物も、恵みも、祝福も、共にますます豊かに増し加えられていきますようにと、心から祈り願います。

【お祈り】

天の父なる神さま

どうか、わたしたちがイエスさまに結ばれた一つの体として、互いのことを重んじ、大切に、痛みや苦しみ、喜びや感謝を、共に分かち合っていくことが出来ますように。

また、一人一人が、体の大切な部分として与えられた賜物を、体のために、イエスさまのために喜んでささげ、共有し、さらに体全体が生き活きと神さまの御業に仕え、神さまに喜ばれる礼拝をささげ、歩んでいくことが出来ますように。

一人一人の信仰が、キリストの体にあって、共に強められ、共に成長し、共にますます豊かに祝福されていきますように。

今日は礼拝の後、教会総会が持たれます。今年の神さまの守り導きを感謝すると共に、新年度、またわたしたちが、さらにイエスさまの一つの体として、心も思いも一つとされて、神さまをほめたたえつつ歩んでいく群れとされますように、聖霊の導きを祈ります。

そして、この群れに、共に一つの体となって喜んで歩む者が、一人でも多く与えられますようにと、心から祈り願います。

このお祈りをイエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 540 「主イエスにより」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン